



TITLE:

ポール・ヴァレリーにおける「錯綜体」の概念について:感性とのかかわりにおいて

AUTHOR(S):

森本, 淳生

---

CITATION:

森本, 淳生. ポール・ヴァレリーにおける「錯綜体」の概念について: 感性とのかかわりにおいて. 仏文研究 1995, 26: 95-105

ISSUE DATE:

1995-09-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/137829>

RIGHT:

# ポール・ヴァレリーにおける 「錯綜体」の概念について

——感性とのかかわりにおいて——

森 本 淳 生

## 序

1932年に対話篇『固定観念』において初めて公にされた「錯綜体 l'Implexe」の概念は、その後公表された文章には現れなくなったが、カイエにおいては30年代、40年代を通してヴァレリーの探究にとって重要な役割を演じている。錯綜体とはいわば構造化された潜在的可能性をさす概念である。『固定観念』では、「感じ、反応し、行動し、理解するという我々の能力<sup>1)</sup>」と定義され、カイエの中ではしばしば、「可能性」、「潜在性」、「ポテンシャル」などと同一視されている。最も示唆に富む例は、「腕の隠された神経＝筋肉メカニズム」であろう。ヴァレリーが時に「残余」と呼ぶ、この隠されたメカニズムには、腕の様々な動きの可能性が内包されているとともに、個々の動きに際してこのメカニズムは特定の構造を取ることでその動きを可能にする(XVII, 63; 1/1040)。このように様々な活動の潜在的可能性であり、また個々の活動を可能にする構造でもあるものを、ヴァレリーは「錯綜体」と呼んでいるように思われる。しかしながら、この概念は今の例だけではなく、カイエのほとんど全ての探究領域において用いられている（言語、感性、記憶、情動、文学、社会など）。

このような「錯綜体」については、1950年代にすでにメルロ＝ポンティが講義の中でごく簡単に言及しており<sup>2)</sup>、また『固定観念』が精神分析批判の側面をもつことから<sup>3)</sup>、無意識との比較を中心とする研究がいくつかなされている。セレット＝ピエトリ<sup>4)</sup>、デリダ<sup>5)</sup>、渡辺芳敬<sup>6)</sup>の研究はこのような観点を中心とするものである。一方、シュミット＝ラデフェルトは、カイエの言語学的思想について研究書のなかで、何度も言語的錯綜体について言及している<sup>7)</sup>。また、金山英二郎は錯綜体と「ポテンシャル」、「利用可能なエネルギー」などの物理化学的概念とのアナロジーについて述べている<sup>8)</sup>。狭義のヴァレリー研究の外に目を転じれば、市川浩が錯綜体としての身体について語ったことは、周知のとおりである<sup>9)</sup>。

しかし、錯綜体の多様な側面とその全体像は必ずしも明らかではない。この小論では錯綜体の全体像の解明はもちろん不可能だが、感性 *sensibilité* との関係を中心にして、その一端を明らかにしてみたい。その際、よく言及される「調和＝倍音的なもの *les harmoniques*」も扱うが、ヴァレリーの感性論を参照することで、今までとはちがうかたちで錯綜体と関係づけられるのではな

いかと思う。

## I. 感 性

ヴァレリーはカイエの中で「感覚とは錯綜体の変化 *variation* である」(XX, 875)と言っている。感覚も人間にとって「可能なこと」の一つであり、*sensible* として、《ABLE》、《IBLE》の総体たる錯綜体(XXII, 550)の一部をなしているのである。我々は、その間の具体的な関係を明らかにしたいのだが、その前に感性についてのヴァレリーの考え方を確認しておくことにする。

ヴァレリーによれば、感覚とは、平衡状態にあった感性界の中に「できごと」によって作りだされた「偏差 *écart*」を「補正 *compenser*」し「無化 *annuler*」するプロセスである。偏差は感覚運動システムにより補正され、「ゼロ=状態」(XII, 183; 1/1172)、つまりもとの平衡状態が回復される。感覚は、この反応の、ヴァレリーの言葉を使うなら「返答 *réponse*」のプロセスにおいて生じる。「したがって、[感覚の] 認識とは、身体と身体行為とをその手段とする組織の中のしかるべき場所にできごとを位置づけるために必要な全てのものにより、そのできごとに返答することである、——全体はできごとを無化しようとする。」(IX, 627; 1/1168) 補正と無化の過程で感覚が生じ、補正が成功すれば感覚は消える。従って、消えることのない苦痛とは、その偏差が補正されず、ゼロ=状態が回復できぬようなものとなろう。それをヴァレリーは、鳥のように隔離された状態 (IX, 626; 1/1168)、あるいは外国人の法的身分 (V, 166; 1/1161) に譬えている。

さて、このようなプロセスとしての感覚を引き起こすできごと、あるいは「始まり」としての感覚(VIII, 560; 1/1166)とは、いまだ明確な感覚になっていない「理解不可能な」「純粹感覚」(XXVII, 455; 1/1203)である。さきの返答のプロセスとは、この純粹感覚を既知の理解可能なもので置き換える行為である。この「驚くべき置換」により、感覚の認識は可能になる。知覚とは「再=認 *re-connaissance*」なのである(XXVII, 455; 1/1203)。なぜなら、知覚とは、なまの感覚をすでにもっている理解可能な要素で置き換えることで成立するからである。認識が可能となるためには、この要素はある総体に属し、他の要素と関係を結ばなくてはならない。認識は様々な要素が関係づけられることから帰結するからである。従って、いかに漠然とした知覚であっても、それは我々が純粹感覚を空間と時間の中に位置づけ、いわばそれを構造化あるいは言語化することによってのみ可能になる。「知覚とは一つの真正の言語である。[……] 記号としての要素が[……] なまの感覚から引きだされ、過去、未来、可能性と相関する一つの真の構築物の要素となるのである。」(XII, 724; 1/1175-1176) 従って、感覚の補正のプロセスとは構造化のプロセスである。言い換えるなら、偏差を生み出すできごととしての純粹感覚は、人間の中に一つの「領野 *champ*」を生じさせ、ここに①自分の位置と②自分に対する返答を見出すとき、この偏差は無化される。

——ここに一つの理論がある。感覚とは、潜在的な *subcurrent* 基本的システムあるいは体制の中に生じた不等性 *inégalité* である。[……]

するとあらゆる感覚は心的世界の中に一つの領野を作りだすことになる。この領野の法則はあらゆる感覚がそこに①一つの場所と②一つの返答を見出すというものである。この二つの条件が不等性を無化する。(XIV, 893 ; 1/1179-1180)

## II. 錯綜体と感性

以上のように、ヴァレリーによれば、感性とは多様な与件を関係づけ、それを組織、領野、システムとでも呼ぶべきものの中に位置づける能力である。いくつかの断章で、錯綜体はこのような組織、領野と比較されている。いくつか例を見てみることにしよう。

音：ヴァレリーは「音の世界 *l'univers des sons*」を「内的な諸関係をもつ——一種の潜在的同時性である——選択的に敏感にされた錯綜体 *implete sensibilisé sélectif* としてのシステム」であるとしている (XXIII, 778)。一つの音は、他の様々な音との関係の中で初めて知覚、再認されるのである。

色：「錯綜体／ある色点の色は、色＝群 *groupe Couleur* の現実化されたものとして見られることができるか、またはそうされなければならない。」(XXI, 100)

音または色の錯綜体とは、その音や色の認識が可能になるためにそれらがその中に位置づけられるべき関係の網の目 *réseau* である。ヴァレリーは、音や色がそのものだけで孤立して認識されるという考え方を批判し、これらの知覚が、例えば色＝群といった、潜在的な構造を必要としていることを主張しているのである。

しかし、我々がここで例えば色の一覧表といったような静的なシステムを想像するだけでは不十分だろう。錯綜体はいかなるより動的な側面をもっている。上の断章でヴァレリーが「選択的に敏感にされた錯綜体」と言っていることに注意しよう。このことは、錯綜体には「敏感にされていない」状態があること（これについては本稿の最後でふれる）、そして「敏感にされた」錯綜体は特定の対象だけを選択し期待するように機能するということを意味する。例えば、音の錯綜体は音と雑音を区別する。従って、この「敏感化 *sensibilisation*」とは、潜在的な選択行為である<sup>10)</sup>。このような観点から、宝くじ *loterie* について述べた次の断章を読むことができるだろう。

宝くじ：「[……] 敏感化。もし私が宝くじで  $n^0 P$  をとったとすれば、私はこの  $n^0 P$  に対して敏感になる——ところで我々は多くのできごとに対しても敏感になることができる——そしてこのことが第二の自我 *MOI n° 2* の定義である（私の帽子）（所有物）。さて、この敏感化の事実は残余や無関心なできごとといった概念をもたらす。敏感化とは錯綜体的な特性 *propriété implete* である」(XXIII, 627)<sup>11)</sup>。

より動的な観点からすれば、錯綜体とは「潜在的行為の領野 *champ d'actes virtuels*」である。

錯綜体は、与えられた要素をある特定の仕方で補完し、いくつかのべつの要素を生み出し、それらの要素の間に特定の関係を作り出す。いくつか例を見てみることにしよう。

**正方形と弧：**(諸錯綜体)と題された断章の中で、ヴァレリーは、「正方形を見る」者は「対角線を作りだし」、「弧を見る」者は「円の残りの部分を作りだす」と書いている。これは言説やメロディー、時間や表面の空隙についても、同様である。「従って、「あたかも」与えられた部分が潜在的行為の領野を規定するかのように、補完的な形成が行われることになる」(XXI, 524)。

**星座とメロディー：**「人は三つの星を、それらの間に線を引かずには見ることができない。二つの音を、それらをその順序で作りだす一つの声の行為の中に位置づけられたものと感ぜずに聞くことはできない。(これが萌芽としての *en germe* メロディーを定義する) 錯綜性 *implexion* は私には決定的に重要な特性と思われる」(XXII, 645)。

むしろ、対象の認識は認識者の側のある特定の潜在的行為の束によって成立すると言わなければならない。上の断章に「作りだす」とか「行為」といった表現が見られることから分かるように、ここで錯綜体はこのような潜在的行為の群として考えられている。正方形の認識は、同時にその対角線の認識をも成立させる潜在的諸行為によっている。メロディーを構成するのは音と音との関係である、という静的なイメージよりも、それらの音を作りだし関係させる潜在的な声の行為の方が強調される。さきほどの色についての断章には次のような記述がある。

**形態：**「諸錯綜体／[……]ある対象の形態は、可能な形態の総体——つまり「空間」という総体を生み出す諸操作の群の縮減 *réduction* として見られることができるか、またはそうされなければならない」(XXI, 100)。

ここではある特定の形態は、全ての可能な形態を含む潜在的な「空間」(例えば、ユークリッド幾何学的な形態であればユークリッド空間)の中でのみ可能になり、そしてこの「空間」は其中で可能な全ての形態を作りだし扱うことができる特定の行為(操作)の群によって規定される。このような特定の潜在的行為の群こそが錯綜体と呼ばれているものであり、個々の対象の認識はこのような錯綜体による行為の結果として可能になるのである。顕在的对象の認識は潜在的行為の総体の一部分により可能になる。つまり、特定のジャンルの認識行為(例えば色の認識)は、特定の潜在的諸行為の群(=錯綜体)を引きおこし、それらのうちの一部の行為により顕在的对象の認識が行われる。

以上の考察から、錯綜体のいくつかのレベルを分けることができるように思われる。

- 1) 顕在的な現象(認識された個々の音、色、形など)
- 2) 顕在的な要素と同類の諸要素との間の内的関係により構成された潜在的な静的システム
- 3) 潜在的な補完的行為の領野(これが人を「敏感化」したり、与えられた対象を補完したりする)
- 4) 潜在的行為の領野が励起される以前の完全に潜在的な能力

カイエにおいてヴァレリーが錯綜体(少なくとも感覚にかかわる)について語る場合、上の2)、3)、4)のうちのどれかの意味で使っているように思われる。逆に言えば、ヴァレリーの述べ方には様々なレベルが混在している。2)は先の例で言えば「色=群」といった一種の一覽表的な静的システム、つまり認識可能な全ての色の総体である。3)は色の認識を可能にする諸行為の群ある

いは領野であり、4)はこのような潜在的行為が励起（「敏感化」）されていないときの状態である（これについては本稿の最後で述べる）。2)は3)の潜在的諸行為によって可能な認識をすべて実現されたものとして相互に位置づけたようなものであるから、二つのレベルの差は見方のちがいに過ぎないだろう。ヴァレリーがしばしば錯綜体を可能なものの総体としていたのを考えれば、錯綜体の本質的なレベルは3)であるということになる。

### Ⅲ. 調和＝倍音的なもの

潜在的な領野としての錯綜体は、ヴァレリーが「調和＝倍音的なもの les harmoniques」と呼んでいる、潜在的諸要素相互の交感あるいは照応を示す概念としばしば結びつけられている。この les harmoniques という言葉は単に「調和」を意味するだけでなく、「倍音」という意味も含んでおり、その場合、身体の中の感覚的反響あるいは苦しい情動的反響をも含意する。すなわち、快と不快の両方に結びつくきわめて両義的な概念である。

さて、錯綜体はこの調和＝倍音的なものとどのように関係づけられているのだろうか。

#### 調和＝倍音的なものの一般理論——そして形態論

与えられた要素は、この同じシステムの諸要素の総体を敏感にする——問いあるいは期待の状態を作りだす。

今私が扱っている場合について言えば、この問いはこの同じ総体の諸要素を期待する。期待されているできごとの性質がいわば局限されるのである。音は音を望む [……]。総体Eは潜在的に（錯綜体として）秩序づけられている。そのためEの要素eは部分のようなものとして、[例えば] 曲線の弧のようなものとして与えられる、——存在する 全体の現前し感覚可能な部分 [……] (XXIV, 466; 1/1197-1198)

与えられた音が音の錯綜体によって補完される（「音の世界」）のと同様に、その音はいくつもの音からなる調和＝倍音的な総体を励起させる。同じように、与えられた弧はほとんど自動的に調和＝倍音的なものによって補完され、円全体が認識される<sup>12)</sup>。これらの場合、感覚にかかわる錯綜体と調和＝倍音的なものとは同じものであり、どちらも認識を成立させる潜在的な領野を意味している。調和＝倍音的な錯綜体とは、諸要素相互の関係により構築される潜在的システム<sup>13)</sup>、あるいは認識を成立させる潜在的諸行為の群である。

しかし、いかに多くの断章でこの二つの概念が同じものとして扱われていても、両者にはちがいがるように思われる。この二つの概念を区別するために、まず次の断章を見てみることにしよう。

#### 感性——調和＝倍音的なもの

[……] すべての感覚はある潜在的なるもの、私が調和＝倍音的なるものと呼ぶ錯綜体を励起する。その展開は、それ固有の置換によって、諸状態の完全なあるいは完璧な継起、感覚的可能性の閉じたサイクルを与えるだろう。(XXIX, 50-51; 1/1204-1205)

ここでヴァレリーは、調和＝倍音的とされた錯綜体は、もし何の障害もなければ、その可能性をすべて展開するだろうと言っている。この展開、あるいはサイクルは閉じている。「調和＝倍音的なるもの。一つの要素は潜在的にある総体を『励起する』——この総体は、その要素＝できごとの偶然的ではない本質的諸帰結によって踏破 *parcourir* されるかのようである。この踏破とは、最初の要素によって規定された他の諸要素——ただしこれらは最初のものに再帰しなければならぬが——を作りだすことである。総体は閉じている。」(XXIV, 382) 「閉じている」というのは、ある特定の感覚を可能にする状態にある錯綜体は、有限の数の感覚しか生みだせないという意味であろう。我々は、たかだか有限個の色しか知覚できない。

ところで、このような展開、踏破といった現象に関して、ヴァレリーはしばしば補色の例をもちだす。例えば、赤色を見たとき、網膜は潜在的に緑色を作りだしている（赤色を長く見た後で急に白い紙の上などに目を転じると緑色が見える）。ヴァレリーはこの事実に独自の解釈を加える。つまり「赤色は、緑色が潜在的に *implicitement* 含まれているようなシステムの部分である」(XIX, 96; 1/1058)。潜在的な緑色 *vert virtuel* は、現実化された赤色 *rouge actuel* の調和＝倍音的なるものの中に内包されているのである(XXV, 403)。この場合、視覚は赤—緑という閉じたサイクルを潜在的に作りだしていることになる。ヴァレリーが「網膜の振動 *oscillation rétinienne*」と呼ぶ現象は、このようなことを意味している。

#### 網膜の様々な振動

色彩の補完的振動はわたしに次のようなことを考えさせる。すなわち、局所的感性は、〔振動の〕減衰 *amortissements* がなくて、いわば自由な状態にあるとき慣性状態にあるシステム *système à inertie* に比すことができる。

もし目が赤色の後に緑色を作りだせば、もし減衰がなければ、——これらの木々は「緑—赤」色であり、この空は「青—橙」色である、と言えるであろう。従って、これこれの振動数をもつ光の作用はエネルギーに関して慣性の働きを促すことになる。光はあるものを開始し、励起する。木々の緑色はセリーの最初の項であり、従って、対象の〔その後にくる例えば赤色などの〕色は時間の関数である〔時間とともに展開する〕。(VIII, 816; 1/1167)

調和＝倍音的なるものは、つねに局所化された感性である。それは特定の諸感覚を可能にする潜在的システムである。そしてそれは励起された状態でのみ考察されている。

上の断章で「減衰」について語られているのに注意しよう。「振動」という言葉と対にして使われていることから分かるように、これは物理学的な意味（振動の振幅の減少）を念頭におい

て使用されている。慣性の法則に従う状態で起こされた振動は当然減衰して止まることはない。減衰するためには、摩擦などが必要である。ヴァレリーはこのようなこととのアナロジーによって視覚を考えている。同時に赤色であり緑色でもある木々を見ないためには、「網膜の振動」が減衰しなくてはならない。「そうでなければ、[印象と認識は] 混濁するだろう。もし、 $\epsilon$  以上それぞれの音が持続すれば、音の継起はなくなり、カオスとなる。」(XVIII, 801; 1/1190)

従って、調和＝倍音的なものと減衰は感覚の二つの原理である。それはまた、音楽や詩など芸術の原理でもある (cf. XII, 303; 435)。通常は、「感性の一般的時間関数と振動のエネルギーの時間関数」は「多かれ少なかれすぐに減衰する」(XIX, 96; 1/1058)。このために知覚や認識は可能になるのである。このような調和＝倍音的なものと減衰との対立は、すでに知覚と感覚の対立としてヴァレリーによって考えられていたものである。

[……] 感性の慣性というものがある—— [……] それに対して減衰の原因がある。そして、[……] 知覚は感覚と対立するかたちで存在している。というのも、知覚は初めのいくつかの項しか用いず、それに続く項によって混乱させられる傾向にあるからである。

もしこれらの後続の項を知覚が知覚するなら、最初の知覚は「世界」へとかわることをやめ、その意味を失うだろう。知覚が認識として可能であるのは、感覚の部分的で調和＝倍音的な展開が妨げられている場合に限られる。(VI, 97; 1/1163)

このため、調和＝倍音的なものは、減衰がなければ、錯乱、カオス的な感覚などの条件でもある。またヴァレリーは、減衰の欠如した状態の例として、夢の状態を挙げている（しかし、夢と調和＝倍音的なものとは決して同じではない、両者が比較できるのは減衰の欠如という点においてのみである）。

ところで、慣性状態にある調和＝倍音的な感覚と、調和＝倍音的なもののセリーの最初のいくつかの項しか用いない知覚との対立は、別の断章では、調和＝倍音的なものと「推移的なもの les transitifs」との対立として述べられている。

調和＝倍音的なものと推移的なもの  
数学的精神は帰結へと直接おもむく。詩的精神は反響 *résonance* の中に——刺激状態 *excitance* へと、「調和＝倍音的なもの」へと直接おもむく。(XXV, 405)

感性のこれらの二つの状態のちがいは、減衰が存在するかによっている。そして、このような減衰の原因は、慣性状態にある調和＝倍音的なシステムの外部になければならない。なぜなら、このシステムの慣性状態にある振動はそれ自体では止まらないからである。感覚をひきおこす「できごと」に対し、感性はすでにみたように調和＝倍音的な錯綜体を励起させるが、それと同時に減衰させるもの *amortisseur* も作動させる。人間の中には、この二つの本性上異なる原理があり、



知覚はこの二つの原理が作動するときのみ可能になる。いいかえれば、感性には調和＝倍音的な錯綜体にとって外在的な減衰させる要因が内包されている。

無限。我々はそれ自身で止まる運動も——そのような反復も考えることができない。それは一種の慣性である。つまり、それらの行為そのものの中に停止を課す、または停止を内包するものが何もないということである [……]。——こうして、分離された行為は、もし人間の残りの部分 *reste de l'être* がそれに停止を課さなければ、無限へとおもむくことだろう。(XXIII, 483)

無限の振動を止めるこの「人間の残りの部分」は、「顯示されていないシステム *système non exhibé*」(ibid.) であるとされている。これも潜在的なシステムである。とすれば、ここでは調和＝倍音的な錯綜体とは別の性質をもつ錯綜体が考察されているのではないだろうか。すでに見たように、減衰の欠如という点で、調和＝倍音的なものは夢の状態と比較されていた。夢の状態とは反対に、覚醒状態は減衰の契機を含んでいる。そこでヴァレリーは次のように言う。「覚醒時においては、——あるものの観念の始まりまたは記号は——多くの可能性が刺激されないようにする、錯綜体の否定的な力 *puissance négative implexe* をもっている。[……] そのために無限の数の結合が禁じられる」(XXV, 91; 2/189)。我々はだから、慣性の状態にあるシステムと同一視される錯綜体<sup>14)</sup>の他に、「位置づけの錯綜体 *implexe de localisation*」(XXVI, 840; 2/195)、つまり調和＝倍音的な感覚ではなく正確な知覚を可能にするような錯綜体の存在を認めなくてはならないだろう。

しかしさらに、この二つの錯綜体はより大きな錯綜体の二つの機能として考察されている。

精神(＝意識と生産)の錯綜体は——完全な意識の瞬間の世界 *univers* と多かれ少なかれ区別され——三つの次元——私の＝身体、私の＝精神、私の＝世界——をもった——空間 *espace* に比較することができる。[……]

この「空間」には、多かれ少なかれ区別された——異なる可能な伝播形態 *propagations différentes possibles* がある。すなわち、一つのできごとが [……] 異なる性質の置換をひきおこす——時には明確にすることができる状況に従って。

一つは、閉じたあるいは相互的な置換である(事実においてそうであるのではなく、権利においてそうである)。もう一つは、完全に推移的な置換である。

私は最初のものを調和＝倍音的なものと呼ぶ(それらは類似、シンメトリー、対照である)。(XXV, 405-406)

調和＝倍音的なものと推移的なものが、その機能の二つの様態であるような錯綜体がある。これをヴァレリーは「精神の錯綜体」、「空間」と呼んでいる。ここでの錯綜体は、意識の各瞬間のさまざまな在り方を可能にするような人間のより潜在的な諸可能性の総体として考えられている。

る。これは、私の＝身体、私の＝精神、私の＝世界（C, E, M）の三つ領域をその現れの領域としてもっているが、これらのいずれにも還元されるものではない。なぜなら、「これらの権能 attributions [C, E, M] ははっきりと区別された諸可能性——潜在的な、……錯綜体的な諸可能性の様々な局所化 localisations であり、様々な総体である」(XXVI, 332 ; 1/1148) からである。従って、「認識の外部に、この三つの項 [C, E, M] のどれにも配置されない何かが存在することを認めなくてはならない [……]。[欄外加筆] 自我／錯綜体／CEM」(XXIII, 301) のようなより根源的な錯綜体は、別の断章では次のように言われている。

意識、思考などの現象は、一般的錯綜体 *implexé général* を源泉 source とする、「自我／残余」という形式による現れ manifestations [MOI / LE RESTE] である。(XXII, 467)

源泉としての錯綜体から、個々の意識状態、認識、感覚を可能にするような潜在的システムが励起される。上の断章では、しばしば錯綜体と同一視される「残余」が、一般的錯綜体と区別されている。この「残余」が本稿の前半で検討した個々の感覚を可能にする潜在的領野であり、この潜在的領野自体、より潜在的な一般的錯綜体の現れである。前者は今まで見たもので言えば、調和＝倍音的な錯綜体や位置づけの錯綜体などであるが、これ自体、源泉としての錯綜体の一つの励起状態なのである。つまりここでヴァレリーは、錯綜体の潜在性の二つのレベルを区別しているのである。

## 結 論

今まで扱ったいくつかの概念をまとめてみると次のようになるだろう。

調和＝倍音的な錯綜体	位置づけの錯綜体
調和＝倍音的なもの	推移的なもの
振動／反響	減衰
感覚	知覚

---

一般的錯綜体／源泉としての錯綜体

本稿では錯綜体の諸側面のうち感覚にかかわる側面を検討し、従来、錯綜体と重ねあわされることの多かった調和＝倍音的なものという概念との差異を明らかにするとともに、錯綜体の概念が内包している潜在性の二つのレベルを区別した。

しかし錯綜体の概念は、この他にも、記憶、言語、情動などの様々な領域で用いられている。

ヴァレリーがこれらの探究領域で考えていたことと錯綜体の概念がどのようにかわるのかは、今までのところそれほど明らかにされたとは言えない。特に社会的錯綜体<sup>15)</sup>についてはほとんど言及されていない。これらのことについては、今後の課題であろう。

## 註

- \* ) 本稿は、1995年1月に京都大学大学院文学研究科に提出された修士論文、《Le concept de l'Implexe dans la pensée de Paul Valéry》(仏文)の序論及び第1部第2章を日本語に移し、若干の削除と加筆を行ったものである。この修士論文においては、言語、記憶、情動など他のテーマとの関係も扱っている。
- \* \*) カイエの引用の後の略号は、ローマ数字とそれに続く数字が *Cahiers, fac-similé intégral*, 29 vol., C.N.R.S., 1957-1961 の巻数とページ数を、斜線(/)で区切られた数字が *Cahiers*, 2 vol., édition établie, présentée et annotée par Judith Robinson-Valéry, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1973-1974 の巻数とページ数をそれぞれ表す。プレイヤッド版の巻数ページ数が書いている場合はこの版に拠っており、ファクシミリ版の巻数ページ数しか書いていない場合はこちらに拠っている。
- 1 ) *Œuvres*, tome II, Bibliothèque de la Pléiade, p.234.
- 2 ) Maurice Merleau-Ponty, *Résumé de cours — Collège de France 1952-1960*, Gallimard, 1968, p.27.
- 3 ) 石田靖夫「《Autre chose》あるいは《ex(-)pliquer》」, 『仏文研究』第18号, 京都大学フランス語学フランス文学研究会, 1987を参照。
- 4 ) Nicole Celeyrette-Pietri, « L'inconscient. L'implexe », in *Valéry et le Moi*, Klincksieck, 1979, pp.312-319. この章においてセレレット=ピエトリは、ヴァレリーの批判した無意識がフロイトのものであるよりはむしろシュールレアリスムのものであること、ヴァレリーが錯綜体の概念を作ったのは「意識的生の不連続性」に対して「備える」ためであることを指摘している。錯綜体と身体、記憶、言語などとの関係を検討した後に、彼女は次のように主張する。「錯綜体は [……] 生理学的、心理学的ポテンシャルの概念に包摂される、拡大された無意識であり再定義された記憶である」。さらに、ヴァレリーは精神分析的検閲を知っていたが、禁じられた部分の解明を試みなかったし、錯綜体という「言葉の上だけの原因」を捏造することで無意識が語るのを沈黙させ、意識の外部に「意識の機能を統御する踏査されていないメカニズム」を排除すると、彼女は述べている。この分析は精神分析的には首肯できるが、本稿ではこのような分析装置を用いることはしない。
- 5 ) Jacques Derrida, « Qual quelle : les sources de Valéry », in *Marges de la philosophie*, Minuit, 1972, p.327 et pp.356-363. この講演でデリダはまず、フロイトとニーチェがヴァレリーの「しりぞけられた源泉 *sources écartées*」だとし、ヴァレリーのフォルマリズムと精神分析的な解釈主義を対立させる。その上で彼は、錯綜体とは他性を内包する「源泉」であり「つねに非=現在を含んでいる現在の複合体」であると主張する。しかし、錯綜体には精神分析的な無意識がもっている抑圧の契機がないとしている。
- 6 ) 渡辺芳敬「ヴァレリー『錯綜体』考」, 『フランス文学語学研究』第2号, 早稲田大学大学院「フランス文学語学研究」刊行会, 1983, 及び, « La problématique de l'Implexe chez Paul Valéry », in *Etude de langue et littérature françaises*, no. 44, Société japonaise de langue et littérature françaises, 1984 を参照。この研究では、無意識と錯綜体が比較され、「記述的」使用においてはこの二つの概念には大きなちがいが無いが、フロイトに見られる局所論的思考(無意識を空間的に表象すること)

や力動的思考は錯綜体には見られないとされている。さらに、身体、調和＝倍音的なもの、反響、記憶などと錯綜体の関係が研究されている。

- 7) Jürgen Schmidt-Radefeldt, *Paul Valéry linguiste dans les Cahiers*, Klincksieck, 1970, pp.22, 36, 80, 115 etc. を参照。
- 8) 金山英二郎『ヴァレリーとポテンシャル』, 勁草書房, 1992, pp.81-82 を参照。
- 9) 市川浩『精神としての身体』, 勁草書房, 1975, 第1章第5節, 及び『〈身〉の構造』, 青土社, 1984, 第I章を参照。
- 10) 訳語について少し述べておきたい。sensibilisation, sensibiliser という語は訳しにくいですが、ここでは「敏感化」「敏感にする」と訳しておく。ただリトレではまず第一に「増感する, 感光性をあたえる」という写真に関する意味がでており、「敏感化」は比喩的意味とされていること、さらにヴァレリーは錯綜体について述べた断章(XXV, 338)の中で「写真家が言う意味での現像」を例に潜在性とその現れを考えていることなどを考えれば, sensibiliser には「増感する」というニュアンスが含まれていよう。また、ここで「行為 acte」という言葉は、実践的意図的行為を意味するのではなく、非常に広い意味で使われている。それは、人間の能力の作動、機能の働きといったほどの意味である。
- 11) Cf. XXII, 439.
- 12) XXIV, 467.
- 13) Cf. XXIX, 350-351 ; 2/1141.
- 14) XXII, 638 ; 1/1076.
- 15) 「社会とは獲得された錯綜体である。諸欲動, 諸欲求, 諸観念と [それに対する] 潜在的な返答——行為の様々なイメージとの, 各個人における対応関係。」(XXVI, 264 ; 2/1528) また, XXIV, 848 ; 2/1521 も参照のこと。